



## 編輯後記

本誌の投稿者の少なく、且意外に発行が後れたことは甚だ遺憾である。この投稿者の少ないことば休刊してゐた關係かも知れぬ、次回発行の際、本誌に數倍したものが出来ることしたら、本誌はそれだけでもかなりの目的を達し得たとも云ひ得る會員諸君の努力と後援を望む。

本誌發行に就いて高田、丸山、永倉、松木、渡邊の諸教授の多大の援助を蒙つたことをこゝに記して深く感謝す。



## 同窓會々報

庶務部から

四月二十四日昭和三年度の幹事選舉は開票の結果左の通り當選した。

- |            |            |
|------------|------------|
| 木村鍊戒 (庶務部) | 吉田孝秀 (運動部) |
| 田代榮正 (文學部) | 矢野鍊明 (購買部) |
| 田中慈石 (會計部) | 三木淨達 (辯論部) |

因みに會長は杉田院長現下で、副會長は高田教頭、庶務部長塩田教授、辯論部長松木教授、會計部長丸山教授、文學部長渡邊教授、運動部長永倉教授、購買部長中條教授である。

四月三十日本學院講堂で昭和二年度の定期大會を舉行した、其の概況は左の通りである。

定刻八時三十分會員一同着席遠藤本勳君開會を述べ、副會長高田惠忍教授の命に依り議長に永倉師を推し直に議長席に着席。幹事の各部報告に次で、各部に對する質問より漸次議事の審議に入る、然れども午後三時三十分時間の切迫により停會を宣せらる。依て翌五月一日午後再び開會す、議事順調に進み舊幹事の辭任式並に新幹事の就任挨拶あり、次で新幹事の豫算案の發表あり異議なく通過。直ちに、緊急動議に入るも議論百出し再び停會を命ぜらる。越へて二十一日午後三回目の續會を開く。開會を宣してより斯に二十日、漸く愛會の至情堂内に充滿し何等の障壁何等の隔意もなく昭和二年度の定期大會は終り午後四時副會長高田教頭の閉會の辭に何れも喜悅滿面嬉々として散會した。

前年度までの幹事は、同窓會としての詳細な記事は事のある都度庶務を通じて文學部から身延教報に掲載してゐた。今度も逐次身延教報誌上に擧げた故に、茲には紙數の許さない邊もあるし、各部から別に報告も出るから今はたゞ骨目の概録に止めて置く。

毎年五月一、二、三の三日間は、甲府市の稻荷祭典を機織と

して、佛耶兩教の法將は群がる民衆へ無上の寶珠を與へてゐる本會よりは松木辯論部長以下二名應援隊として出張した。

支那動亂の災を享けて、第三師團管下に屬する會員高等部二年生石黒湛全君は出征の命を受く、依て五月十一日午前十時樓神の法窟に於て其の報告式を擧ぐ、本會代表の式辭に次で皇國の爲に身命を抛つて君恩に報ゆるの答辭あり、本學院校旗を先頭に出征の途に就かれたり。

五月廿四日佛敎研究の爲來朝中なる獨逸神學博士テットマーラバツハ並瑞西國人カル、ワイザンゲルの兩氏來院、祖山學徒の爲に一場の感想講演あり、大いに得る處ありき。

長らく學院講師として、哲學方面の科目を擔當せられし八木友眞師は、第一學期限り敎職を退かれた、依て送別謝恩茶話會を大客殿に開催す、師の置きみやげたる哲學的精神は今後益々學院に成長することであらう。

前記の如く支那動亂に出征せる會員石黒湛全君は暴露三ヶ月天津の風に櫛り雨に浴したれども、茲に目出度凱旋せらる、依て九月五日午後、大客殿に於て祝賀茶話會を開催す。院長狹下御訓示に次で石黒君の出征中の所感演説あり盛大なりき。



## 辯論部だより

雄辯！ それは現代に活躍せんと欲するものゝ缺くべからざる最大要件である、況んや衆生敎化の使命に生きんとする吾等宗敎家に於てをや。

於茲乎本部の責の存する處、愈々重且大なるを痛感せずにはゐられぬ。

……時は流れる……時代は遷る……因習的な形式や昔慕した迷信の殻を脱ぎ捨て、眞の大白法を宣揚し、「宗祖が信仰の」徹底に大いに勇猛精進せねばならぬ。

然しそれには熱烈なる意氣を要し、忍耐を要し、而して吾等の武器とするものは、本より金力にあらず權力にあらず唯々爛三寸の舌頭があるのみだ……。然り！ この舌頭こそ吾等に取つては唯一の武器であり生命でなくてはならぬ。

今や宗敎の名、當に地に落ちんとするの悲運を見るは何が故ぞや。然り而して又これが挽回の重任を擔へるは誰ぞや。

おゝ奮起せよ！ 使命に生きんとするの若人。汝の奮起こそ實に刻下の急務である。而してこれが實現は、一に偉大なる辯論の力のみ能くする處である。

斯くして時代は辯論を強要する。吾等豈時代に逆ふを欲せんや。本部では毎週土曜の午後を割いて耕辯に當て、且、學期毎